HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	文化とアイデンティティの社会学Ⅰ
著者	犬飼，裕一；INUKAI，Yuichi
引用	北海学園大学学園論集(164・165)：(1)-(27)
発行日	2015-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

文化とアイデンティティの社会学　I

犬飼裕一

第一回　社会学とはどのような学問か

(1)　視点

社会学とはどのような学問なのだろうか。社会学は少なくとも、大学以前までの教育課程ではほとんど見かけないような類の領域である。社会学を除くその他の社会科学的な学問は、学生にとっては比較的馴染みがあるに違いない。それでは後者の学問たちと社会学とは、どのような違いがあるのだろうか。もしかしたら学生諸君は、社会学がこれまで学んできた学問とはやや毛色が違うように思っているかもしれない。それでは、社会学にはどのような〝特殊さ〟があるのだろうか。それは、社会学という学問領域における、他からは独自の「視点(領域)」である。これこそが、社会学の特殊性をもっとも的確に示す点であると考えることができる。

しばしば冗談めかして言われることなのだが、たとえば「経済学の研究対象は何か」と尋ねられたとき、それは「経済」だと答えるだろう。「法律の研究対象」は「法律」だし、「政治学」は「政治」、「教育学」は「教育」等々。このようにして、それぞれの分野の研究者はそのようにして答えるに違いないのだが、それでは「社会学の研究対象」とは一体何なのだろうか。それは「社会」と答えるべきなのだろうか。これはあまりにも一見して自明のことでありすぎるのだが、もちろんけっしてこの回答が誤っているわけでもない。それではもう少し突き詰めていえば、その「社会」とは一体何なのだろうか。もっといえば、経済学が対象とする「経済」や法律学の「法律」、政治学の「政治」なども、これらすべては「社会」ではないのだろうか。そしてそれをふまえてもういちど、「社会とは何か」という問いや、「社会学とは何か」という疑問に直面することになる。逆説的にいえば、もしも社会が経済学・法律学・政治学などの学問だけですべて語りえたのならば、社会学は今頃消滅してしまっていることだろう。

「社会学とは社会を対象とする学問である」と額面の通りに言うのは容易い。それでは、これがもし社会学の独自の視点（領域）であるというのなら、たとえば経済学は社会を対象としない学問である

と言えるのだろうか。それはやはり否である。経済学が「経済的な領域を対象とする学問」だからといって、結局のところそれが対象としているのは社会である。その他の社会科学も同様である。

上記のことはまるで言葉あそびのようにも思えるのだが、実はかなり深い議論なのである。端的にいえば、実は社会学には、独自の領域が存在しないのである。たとえば経済学には、「富あるいは資源の効率的な再分配」や「経済生活の再生産過程」をはじめ、もっとマクロな視点へ展開するとそこには「国家間の貿易」や「成長理論」というような、やはり経済学独自の領域が存在する。しかし社会学にはそのような固有性は明確に位置づけられていない。なぜなら社会学は社会のありとあらゆる側面を論じることのできる学問だからである。

もっといえば、独自の、ないし特定の目的もまた社会学には存在しない。たとえば経済学には独自の領域が存在する。「そも経済とは何か」という議論は込み入った話になりそうなのでひとまず横に置いておくとしても、経済の諸問題は、法律学とは違った領域に位置しているはずである。政治の諸問題は、教育学のそれとは異なった次元にある。「社会科学」と呼ばれる学問領域には、それぞれ社会を視るための独自の色眼鏡がある。つまりそれぞれがみな「独自の領域」を持っているということになる。しかし一方で社会学とは、言ってしまえば「なんでもアリ」の学問なのだ。何かある特定の独自な領域があるわけではない。そして特定の目的もない。たとえば法律学は、法秩序を維持しようとするような目的を包括的な含意としているはずである。少なくとも無秩序をもたらすことを目的として法律を研究する学問ではないはずだ。経済学もまた然りである。経済に混沌をもたらすために研究をする学問ではなく、これはむしろ秩序を社会および経済にもたらそうとする試みである。むろん、ある経済政策が社会の秩序を乱してしまうということはありうるだろう。しかしそれもまた、社会秩序に混乱を招くために実行されたものではない。あくまでも目的は、経済や社会の発展のためである。

しかし社会学には、たとえばそれらのような「社会を良くする」というような目的がない。むろん、「社会を悪くする」ことを目的とした社会学者は、その言葉のレベルでいえばおそらくいない。しかし、それでは一体「良い社会」とは何を意味するものなのか。ある者たちにとってすればある社会状態を「良い」と判断するかもしれないが、もう一方ではそれを「悪い」とするかもしれない。そういった社会に対する価値判断に関わる問題が浮かび上がるなかでさえ、社会学はそれについて熱心に追求するわけでもない。

このように説明すると、今まで他の社会科学に多かれ少なかれ触れてきた人々は、社会学に対して何らかの疑念を抱くことになるかもしれない。「そんないい加減な学問があっていいのだろうか」と訝しむ者もいるだろう。あるいは、社会科学の主流にいる研究者が本音で語るならば、たしかに社会学という奇抜な学問が無くなってしまっても別段困ったことにはならないのかもしれない。このような立場も十分に有りうることは認めなければならないだろう。

しかし、現に社会学は存在している。それは何故なのだろうか。一体何のための学問なのだろうか。この問いかけはかなり重要な意味をもっている。社会学が学問として今もなお成立しているのは、

この学問が他の社会科学とは異なった視点で考えることができるからである。

⑵　社会学の領域としての「社会科学批判」

たとえば教育学と教育社会学との間には大きな違いがある。みなさんのなかにも教職課程をとる人がいるとは思うが、一例をあげると教育学では、小学生に通う生徒が登校を拒否してしまった場合にどのように考えるのかというと、授業の工夫なり地域に開かれた学校の構想を打ち立てたりして、子供たちが楽しく学校生活を送れるようにしようとする。それに対し教育社会学では、視点がそれとは異なっている。この学問領域では、たとえば「子供が学校へ行くとはどういうことなのか」と問うてみたり、あるいは「人間社会にとって学校とはどのような意味をもっているのか」と考えてみたりするのである。もっといえば、人間の織りなしてきた歴史のなかで学校とはそれぞれの時代においてどのような役割と意義をもっていたのか、ということについても検討する。さらに直接的な問いとして、「なぜ子供が学校へ行かなければならないのか」というテーマにも行き着くことがある。

このようにみるかぎり、教育学と教育社会学とが明らかに異なった視点にあることがわかるだろう。両者は相容れない観念の下に成り立っているととらえることもできるだろう。一方はどうにかして学校という組織文化へと生徒たちを適応させようと研究を重ねるが、他方はそもそも学校の必要性に対して疑念をもっている。このふたつは発想の根源からして異なっているのである。

社会学の独特な側面はもちろん教育学に限ったことではない。たとえば経済学でも同様のことがいえる。「経済社会学」と呼ばれるものがあってもよいのだが、どうにも活発な領域ではない。その代わりに「経済人類学」というかなり個性的な学問がある。一般に経済学といえば、金銭的な損得や国家の経済事情に対して関心を向けられる学問だ。つまり、景気を良くしようという目的があって、そのために経済政策などをこしらえるのである。一方で経済人類学とは、そもそも人間にとって「経済」とは何か、ということを問う学問である。人類の歴史にとって経済学が扱う市場経済というものはどのような意味をもっているのか、より哲学的にいえば、人間にとって「お金」とは何なのか、などということを研究しようとするのが経済人類学なのだ。場合によっては、「そもそも人間は経済がなくとも生きてゆけるのではないか」とラディカルな問いを提起することもできる。もともと人類学はこの手の議論を好む傾向がある。

ここでもまた、同じ「経済」という領域を扱っているのにもかかわらず、経済学と経済人類学とでは、視点が異なっているように思われる。このように視点が異なるということは、しばしば避けがたく学問の領域間で対立も生じることだろう。双方の依拠しようとする「常識」というものが根本から異なっているからである。

もっといえば、社会学は既存の社会科学に対する批判も行う学問である。たとえば、もしも、世の中のことが経済ですべて理解することができるのだとしたら、いまごろ他の社会科学は無くなってしまっているだろう。社会学はもちろんのこと、法律学、政治学、哲学までもが、すべて経済学に取って代わられてしまうにちがいない。

むろん常識的に考えてみても分かる通り、実際にそのようなことにはなろうはずもない。社会学は、そのようなわれわれの常識というものを問い直すことを重要な仕事としている。

(3) お金と幸福について――社会学的見地から――

今日の多くの人々には、日常を経済的な視点から様々にみる習慣というものがあるように思える。しかしそれがたとえ一部事実だとしても、それではこの世の中が、実際としてほんとうに経済中心で動いているのだろうか。

たとえばいま、手元に有り余るお金があったとしよう。億単位にものぼるその大金を手にしたとき、人々は一体どうするのだろうか。これを貯金すると、たしかに利子の配当は相当なものになるだろう。利子の分をさらに預金してさらにまた利子を生む…というようにお金をひたすらに増やしていくことはもちろん可能である。それでは、そのようにお金を増やしていって一体どうするというのだろうか。つまり、ここで言いたいのは、ただただ額面上のお金が増大していくことによって人間は幸福になれるのだろうか、ということなのである。実は、これが重要な問いなのである。

実際にお金持ちの人々をみてみると分かる通り、彼らはみな立派な住居を構えていたり、いい車、いい服、高級な食事などを嗜んでいるが、しかし逆にいえば、その程度なのである。広い世界を見わたせば、理想の教育をするために学校を作ったり、コンサートホールや美術館を建てたりするお金持の例はあるが、それらの場合は、すでに「お金」でできること以外の要因の方が大きくなってしまっている。ところが、経済学では、明示的であれ暗黙的であれ、お金をもつことが幸福であるような含意が込められており、そして実際にそれが前提とされているきらいがある。

それではほんとうに人間は、お金が増えたことによって幸福になることができるのだろうか。どうもそうではないみたいだ。それではなぜ、その一方で人々はお金を欲するのだろうか。なかには金銭欲というものが一切ないような者もいるかもしれない。この場合は、また別の議論をする余地があるように思えるのだが、しかし、少なくとも現在の当面の目的ではないのでひとまずこの話は退けておくことにしよう。

実は人々は、お金それ自体を欲しているのではなく、「お金を使って何かしている自分」を欲求しているのではないだろうか。そこにはいい車に乗って立派な家に住んでいる自分によって表現される〝何か〟がある。それは社会のなかで重要とされ、お金持ちとみなされ、ＶＩＰである自分というイメージである。あるいは、社会的評価や尊敬、名声などを受ける手段がお金なのだということもできる。

もっといえば、よく耳にするフレーズかもしれないが、「お金で買えるもの」と「お金で買えないもの」の話。金で買えないものはない、と豪語した人間が逮捕されたりする今日において、たしかにこの世の中にはお金で買えないものが実に多くある。逆にいえば、人々がお金で買おうとするものは、たいてい大したものではない。一方でお金ではどうしても手に入らないようなものがある。そして同時にそれは多くの人々が欲してやまないものでもある。つまり、社会的評価である。周囲からの尊敬や称賛、そして社会的承認こそが、

人々がお金で買えるものよりも欲求する事柄なのだ。

このような社会的評価は、残念ながらお金とはあまり関係がない。経験的にもわかることかもしれないが、金銭的に裕福な人間が社会的には低い評価しか与えられないような場面にしばしば遭遇する。たしかにお金持ちであることは単純にうらやましいのだが、そんな人物が低い社会的評価の下で幸福そうに見えるかどうかといえば、おそらく否である。社会的に評価されないお金持ちの人間よりも、そこそこお金があって、なおかつ周囲の尊敬を集めている人間のほうが、間違いなく幸せそうである。誰からも愛されない、是認されないような年収数億円の仕事よりも、年収はそれよりももっと少なくて、たとえば月収はせいぜい数十万程度だけれども、人々の尊敬や愛情の対象となるような仕事のほうが、かなり幸福な人生を送ることができるのではないだろうか。

このように、人々が通常抱いている一般的な観念としてみると、個々人の経済的な成功や繁栄があたかも重要な事柄のようにも思えるのだが、実際によく考えてみると、人々はそのお金を使ってそれほど大したことをやっていないのである。むしろ、お金でどうにかできる範囲はとうに限界があって、そうでない世の中の事柄のほうが多いのである。もしも、お金で社会的尊敬を買うことができるのであれば、たとえば、ノーベル賞受賞のような「名誉」あるいは「社会的評価」は金銭的に解決することができるはずである。しかし、そんなことをしても多くの人々からの称賛や評価を与えられないことは、経験的にわかりきっていることである。

以上のように、やはり社会というものは、どうしても「経済」ないし「お金」だけから成り立っているとは考えにくい。そうではなくて、人々の生きる社会というものは、実際には複雑な社会的人間関係によって支えられているのである。このような視点をもって研究していくのが、社会学なのである。これから何度も強調することになるが、人間というのは、いうなれば他人から褒められたくて生きているのだ。周囲のことなどどうでもよくて、自分のお金だけが頼りになると考えている人間はたしかに一部いるのかもしれないが、彼らは不幸である。むろん、お金の問題など実に些末な問題だと片づけるつもりはない。そうではなく、お金というのは重要であっても、「手段」のひとつでしかないのだ。いい車を買ったり立派な邸宅を手に入れるのは、まさしくお金という手段によって達成できるものである。尊敬されるかは別として、とりあえずそれらのような財を手に入れることで、少なくとも貧乏人には見えない。このときお金とは、いうなれば他人からみすぼらしく見られたり憐れみをかけられたりすることを回避するための手段ともいえるだろう。しかしそれでもなお、積極的な意味での社会的尊敬や名声というものは、お金で手に入るという保障はどこにもないのである。

⑷　社会学の成立と「三つ子の新興社会科学」との関係について

それではこの社会学というものは、いつ頃から成立したものなのだろうか。現代までつづいている社会学の源流は、一九世紀末から二〇世紀初頭頃にある。一九世紀前半のオーギュスト・コントによって開始された〝社会学〟は、一般的な社会学とはだいぶ異なる学問なので、ここで論じるのは前者の社会学に的を絞ることにする。

この新興社会科学は、単独で出現したわけではない。社会学が学問として認知される同時期に、兄弟分である他の二つの社会科学も登場した。この〝三つ子の新興社会科学〟はヨーロッパで誕生した。それらはフランスで生まれた「社会学」、イギリスで生まれた「(文化)人類学」、そしてドイツ哲学から分岐して生まれた「心理学」である。これら三つは、生まれた国はそれぞれ異なるが同時期に登場し学問なのである。

この三つは、特定の目的や領域がないという点で類似している。たとえば人類学は、「特定の研究対象は何か?」と訊かれても、それは「人類」と答えるだろう。「人類」とはいったものの、それが当てはまる領域はかなり幅広いということがわかる。社会のあらゆる事柄は、ほとんどの場合人類が関わっているからである。言語、芸術、経済、政治、そして法律なども、当然ながらすべてその「人類」と関係している。むしろ、社会において人類が携わらない領域などないはずである。このことからもわかるように、人類学という学問には、特定の領域というものを定めることは非常に難しい。とはいったものの、実際には、人類学にも得意とする領域はある。

そして心理学もまた然りである。社会のあらゆるところでは人々の「心理」というものが関わっている。たとえば教育心理学や経済心理学などがその代表ともいえるだろう。アプローチの仕方はさまざまだが、心理学もまた、人類学と同様に、特定の領域や目的というものは実質上存在しない。「心理を良くする」というのも明らかに不自然だし、さらにいえば、もし心理学に特定の目的があったとしたら、それはそれで何か恐ろしいことを企んでいるように思える。したがってこの学問もまた、文化人類学と同じく、何か特定の研究対象や目的というものを明確に定めることが出来ないものなのである。

このような話をしていると、わたしよりも人類学や心理学に詳しい人たちが、「いやいや、これらの学問に特定の領域がないというのは違う」と主張したくなるかもしれない。たしかに「得意分野」というものは存在する。たとえば社会学や人類学の学者たちが冗談めかして言うのは――心理学の研究者はあまり言わないのだが――次のようなことである。

社会学、人類学、心理学はそれぞれ身なりが違う。心理学は実験を行うことができるので、何だか理系の雰囲気を醸している。心理学の研究者たちはしばしば白衣を着ていたりする。それに対して人類学が行っているのは、いわゆる「未開人」や自分たちとは異なる文化体系をもつ人々を対象とする研究である。人類学者たちはフットワークが重要となる。彼らは飛行機を何度も乗り継いで地球の裏側まで研究のために赴くのである。場合によってはそこからまた車やバス、そして電車などを乗り継いでかなりの長距離を移動する。そのあとさらに「道なき道」をぐいぐいと進んでゆく。そこが彼らの研究のためのフィールドなのだ。社会学者からみれば、そのような彼らのフットワークに毎度驚かされる。そして人類学者は、いざ目的地へと着くと、堅苦しい白衣やスーツなどではなく、いくぶんラフないでたちで研究活動に臨む。さてそれでは社会学者はというと、まず研究フィールドはあまり長距離をあちらこちら移動するのを好まない。せいぜい公共機関を使って移動できる範囲くらいだ。

そして彼らは研究者特有の身なりをするわけではなく、スーツとネクタイを着用しながら研究に励む。いうなれば社会学者とは、自分自身の暮らしている社会について研究を行う人々である。そして、他の社会について研究するのが人類学なのである。

これらに対し、心理学はどうかといえば、やや込み入った事情がある。もともとドイツでは哲学が盛んであったが――いまでも盛んといえるが――、そこで生まれた心理学も当初は哲学的な要素がかなり含まれていた。たとえば興味を持っている人もいるかもしれないが、フロイト心理学は半分くらい哲学的要素が混入している学問である。一方で今日の心理学は、いわゆる「実験心理学」とよばれるもので、とりわけ第二次世界大戦後は、学問の中心がヨーロッパの大陸系からアメリカへと移った際に、その実験を中心とする学問の風潮から、心理学もまたその影響を多分に受けたのである。〝三つ子の社会科学〟という括り方は、社会学者や人類学者にとっては受け入れられやすいが、今日の実験的アプローチが中心となった心理学研究者からすれば、それは認められないかもしれない。心理学にまつわる学問史的には、そのような違いが生まれてくるかもしれないとはいえ、とりあえず〝三つ子の社会科学〟のなかではとりわけ社会学と人類学は依然として類似した側面を多く含んでいるのである。

ちなみに、人類学がイギリス生まれであることを先程説明したが、実はこの国ではあまり社会学が盛んではない。それではイギリスにおいて社会学的な研究をする学問がどのように位置づけられているのかというと、たいていの場合それは「社会人類学」と名称されている。つまり、この国では、人類学の一分野として社会学が位置づけられている。これはイギリスで生まれた人類学という学問の伝統的な背景が関わっている。三つ子の社会科学とはいえど、このようにそれぞれの国の学問の潮流によって微妙に捉えられ方が異なっているのである。

この三つの社会科学にかんしてもう少し付け加えるならば、それぞれに実は明確な境界線が引かれていない。社会学、人類学、心理学は、見方やアプローチはそれぞれ異なるにせよ、実は同じような事柄について取り扱っていたりもするのである。たとえば、「ミクロ社会学」は、かなり心理学のそれに接近したものである。人間がどのような状況でどのような行動を起こすか、何らかの事件が起こった際にわれわれがどのような行動を選ぶのか、エレベーターという空間のなかでどんなことを思い、そして行動するのか、といった研究は心理学が得意とする領域だが、このようなことを取り扱ったものが「ミクロ社会学」なのである。

あるいはまた、社会学は言語や文化について取り扱うことがあるのだが、これにかんしてより進んだ研究を行っているのは人類学なのである。人類学者が長年の研究で蓄積したものを社会学者が取り込み、さも社会学が研究したかのように議論していたりもする。

このようなことがあるから、三つ子の社会科学はそれぞれお互いに批判し合うこともしばしばなのだが、実際のところでは互いの領域に口を出したり割り込んだりすることを黙認している。社会学で論じたことを他の二つの学問がさらっていってしまうこともあるし、その逆もまたありうることなので、ある意味では、それぞれの

研究成果を互いに融通し合っているともいえる。学問の縄張り意識というものが多かれ少なかれあるにせよ、厳密に区別したり線引いたりすることはあまり意味がないので、各々の研究者はそのようにして認め合っている。

あとで展開する「文化」についての議論もまた、当然ながら人類学の得意とする領域である。しかしこれもまた、社会学的研究としてそれを取り込んだり、それによって得られた成果を人類学がまた取り込んだりと、互いに共有しながら研究をしている。

やや足早に説明をしてしまったかもしれないが、つまるところ、ここで重要なのは、社会学という学問は、経済学や政治学などのような既存の社会科学とは別の視点をもって「社会」について論じるものなのである。そして、繰り返しになるが、この点でいえば人類学や心理学もまた、似通っている。こうして三つ子の新興社会科学は、それぞれの異なった視点やアプローチで同じ社会について研究する。「社会」について経済だけで論じることはできない。単一的な視点で社会を見ていこうとする態度に対して社会学は疑問を提起するのである。

(5) 社会学の基礎概念

さきほどまでは社会学の視点について中心的に説明してきたが、ここでは、いよいよ社会学の基礎概念について説明していくことにする。

これまで論じてきた通り、たしかに社会学は他の社会科学に比べて自由にテーマを設定することができる。経済学や政治学はそれ以外の領域に手を伸ばすことは少ないが、社会学にはそのような制限はない。逆にいえば、あらゆることでも社会学的に論じることができるのだ。たとえば、いまこうして講義を受けている学生たちを研究対象とすることもできる。「おしゃべりの社会学」とでも題しておこうか。これは、おそらく十分考察の対象となりうるだろう。人と人とが特定の空間において、どのようなことを話し、またどのような反応を示すのか。まさにミクロ社会学が得意とするテーマである。「おしゃべり」について研究する人がいるならば、また、エレベーターについて何か社会学的に研究している者もなかにはいるかもしれない。こうしてみると非常に多様であまりにも自由なのだが、しかしどれも学問として成り立っている。

しかし、それほど自由に論じる社会学が学問として成り立っているのはなぜなのだろうか。これは、社会学には基礎概念というものがあるからだ。それでは、ここで「概念」とは何かという議論してしまうと哲学的でかなり込み入った方向へと進んでしまうので、いまはそれについては触れないでおこう。話を戻してみると、社会学の議論は、必ず用語をあらかじめ定義して使い、また、特定の理論に基づいて対象を考察するようにすることで成り立っているのである。しかし、それさえ守れば、あとは自由に対象やテーマを設定することが許される。ただし、自分の用いる用語の定義は厳格に守らなければならない。あるいは、自分の依拠する理論を、はじめに明確に示さなければならない。これらの約束だけはきっちりと守らなければならない。さもないと、社会学という領域があまりにも自由で広範にわたっているために、ほんとうにこの研究が学問として成

り立っているかも怪しくなってしまう。

世の中にはちらほらと「なんちゃって社会学」というものが出てくる。たとえばわたしはかつてスポーツ新聞で「競馬の社会学」というのを見つけたことがある。中身は、おそらく古参と思われる新聞記者がこれまでの競馬の名シーンなどを蘊蓄を交えながら書いたものであった。もちろん、それ自体は十分に面白い内容なのだが、社会学的な分析は欠けている。ようするに、「社会学」という名をかりた競馬コラムであった。少なくともこれを社会学として取り扱うならば、人間および社会にとっての競馬の位置づけや、意義を考察してみたり、馬それ自体が社会にとってどのような意味をもった存在なのかということを考えてみたりと、そのような方向から入りこんでいくべきだろう。このように、社会学はあくまでも用語の定義や特定の理論に依って立つことで学問として成り立つことができるのである。

⑹「文化」における社会学的概念について

ここでは社会学の基礎概念をひとつに絞って論じることにしよう。それは「文化」についてである。

社会学で用いる用語は定義して使わなければならないことをさきほども説明したが、というのもそれは、日常的に使われる言葉と社会学で用いられる言葉とでは意味が異なっていることがあるからである。この「文化」もまた、社会学的に論じる際には日常的なそれといくぶん違いがある。

日常的に文化という言葉を使う例として、たとえば「文化会館」や「文化水準」、「文化財」などが挙げられる。そしてこの場合の「文化」が示す範囲とはかなり限られたものである。日常語で、町に美術館や図書館などが建てられることによって「わたしの町の文化水準が上がりました」という場合、それはかなり限られた意味での「文化」である。

たとえば、美術館などは社会学において「高級文化 high-culture」と定義されている。この日本語訳には高級と低級という差別的な意図が見え隠れしているようにも思えるのだが、それはまた別として、とりあえず定義上ではたとえば茶道、書道、演劇作品、クラシック音楽、芸術的な映画などが該当している。これらは特別な学習によって身に付ける文化である。他方では「大衆文化 popular culture」という概念がある。いわゆるポップカルチャーとして分類されるようなものである。

そしてこれらの「文化」とは別に、社会学で用いられる「文化」という言葉の定義がある。それはかなり素朴でおそらくほとんどの社会学者から反論される余地もないほどにシンプルな定義ではあるが、ここでいう「文化」とは、「**長年にわたって身に着けられ、共有される価値の総体あるいはシステム**」のことである。ここで重要なポイントは「身に着けられ」「共有される」という点にある。

一方で、この社会学的な文化の定義とは対になる概念も存在する。それは「自然」である。この概念もまた、日常的に用いられる意味とは異なっている場合が多い。この「自然」とは、たとえば、「北海道の自然が豊かである」、と表現するような場合に用いられる意味ではない。英語では nature だが、実はこの nature もまた場合によっ

て使い分けられている。社会学で用いる際の「自然」とは、人間の手が加わっていなくとも存在し、その状態を保つもののことを指す。それに対して、人間が長年にわたって身に着けながら共有したものが「文化」である。「文化」と「自然」はここではそのようにして区別する。

この「文化」と「自然」の二項対立状態をくらべてみると多くのことがわかるときがある。自然とは「生まれつき」や「遺伝」のことであり、文化は「環境」や「社会的背景」とみなすことができる。それでは「長年によって身に着けられ、共有される価値の総体ないしシステム」とは一体何なのだろうか。ふだんこのように言葉を厳格に定義付けて物事を考える習慣のない人にとってみればうまく考えが及ばないかもしれない。しかし、もしもすぐさまこれらのことを理解できて、「その種の「文化」というのは、一九世紀的な古臭い定義ではないか」と思ったりできるのだとしたら、おそらくわたしの講義を聞く必要もないだろう。話を戻すと、その価値の総体とは何なのかと問うとき、すぐに思い当たるものがいくつも挙げられる。もっとも典型的な文化のひとつは、「言語」である。さきほども述べたように、この言語にかんする研究を得意とするのは人類学である。ちなみに言語学という学問もあるが、これは人類学と並行的に研究が進んだ学問のひとつである。

わたしはいまこうして日本語を使って講義しているし、黒板にも当然日本語を使っている。学生たちもまた日本語でわたしの講義を理解し、日本語でノートをとっている。授業として成り立っているのは、わたしとみなさんの間に「日本語」という「文化」が「共有」されているからなのだ。

当然のことではあるが、わたしがこれからアラビア語で講義をするとしても、あるいはモンゴル語でもいいだろうが、学生はその講義をまったく理解できないだろう。もちろん、ここでアラビア語やモンゴル語やヒンディー語が言語として劣っているのだということを主張したいわけではなくて、つまり言いたかったのは、教員と学生との間に日本語という言語の文化が共有されているからこそ、会話が成り立ったり講義の内容を理解できるのだということである。われわれの間には「アラビア語」が共有されていないので、意思疎通が成り立たないのである。日本語を用いる講義を日本語学科のないアメリカの大学でわたしが行ってもまったく通じないはずである。現地の学生たちは、珍しい東洋人が何やら話しているぞと興味があって初めのうちは聴いてくれるかもしれないが、次第に耐えられなくなってくるに違いない。それは日本語が劣っているからなのではなくて、それが英語を話すアメリカ人が共有していない言語だからなのである。

言語をこのように文化として考えてみると興味深いことがわかる。言語それ自体は完全に身に着けられ共有された価値の総体としての文化なのだが、「言語を話す」ということは人間の遺伝、すなわち自然として決定付けられている。遺伝的には、人間にもっとも近い生物とされるチンパンジーたちですら、どれだけ訓練しても言語だけは操れないのである。むろん、たとえば何かのドキュメンタリーでは、人間と動物が心を通わせている場面が映し出されることもあるが、それは言語という観点からみれば、特筆すべきものではない。

エサをもらったり芸をしたりすることで動物が人間と呼吸を合わせることはたしかに出来るだろうが、しかし、人間と動物が、たとえば「アメリカはシリアに攻め込むだろうか？」という議論を交わすことは到底不可能である。人間は言語を操ることで、そのような事柄を題材にしてコミュニケーションをとることを可能とするが、動物はそれができないのである。彼らは「シリア」や「アメリカ」という音の意味を理解できないのだ。われわれ人間は言語を媒介にしながら抽象的な概念を作り出すことができるのに対し、動物にはそのようなことをすることができない。このように、人間の自然としての言語能力は、文化としての言語とはまた別に存在するのである。

とはいったものの、たとえ言語能力が遺伝的に決定されているのだとしても、その用いられる言語（あるいはその体系）は、共有されなければまったく意味をなさない。しかもそれは当然ながら長年にわたって身に着けられる必要があるのだ。言いなおせば、われわれが外国語を修得する際に伴う苦労の根源的な要因はここにあるのだ。その言語を母国語とする人々が長年にわたって身に着け、そして共有しているそれら言語を、その経験をしないままに修得者は獲得しようとしているのだ。苦労が伴って当然ともいえるだろう。

このことに関連していえば、たとえばよく勘違いしている人もいるのだが、子供の頃に海外に住んでいたからといって、その国の言葉に熟達しているということにはならない。よく考えてみると、その人が過ごしたのは小学生までの期間であり、したがって当人が操る言語もまた、小学生レベルの語彙力ということになる。われわれもまた同様のことがいえる。同じ母国語を使うにしても、一〇歳の子供が話す日本語と、二〇歳の学生が使う日本語には、かなりの差があるだろう。実はこの違いというものが、言語においては非常に重要な意味を持っているのだ。大人になった人々が小学生の頃の日本語力（あるいは語彙力）で現在の生活を維持することができるとはどうしても考えにくい。

もっといえば、こうしていまわたしの講義を受けること自体、ある意味では日本語の勉強なのである。つまり、このようにして、あらゆる場面でわれわれが「日本語」という文化を蓄積するからこそ、それは言語として通用できるのである。たとえば、旅行先で宿をとったり食事をしたりするための言語は比較的簡単に獲得できるだろうが、しかし世の中はそのように単純な意思疎通の言語体系から成り立っていないのが実際である。さまざまな場面でさまざまな人たちと触れ合うことで、自分たちの用いる日本語という言語体系は各々に蓄積され、また共有されてゆくのである。誰かと喧嘩したり愛し合ったりすることですら、それは言語文化の蓄積に関わっている出来事なのだ。

つまり究極的には、このような実に複雑な相互作用と長年にわたる蓄積を経て獲得され共有される言語を外国語として学ぶ人間が完全に習得することが、現実的に不可能であるということがわかる。たとえば二〇歳のアメリカ人が話す英語とは、彼の二〇年分の蓄積の成果なのであり、そこには二〇年分の経験が積み重なっている。このため、日本語を使って二〇年間育った人が同年代のアメリカ人の英語力を習得するには、二〇年分の蓄積の差を埋めなくてはならない。もちろん実際上では、そこまで外国語を究めなければならな

いというわけではないが、文化としての言語という観点からみれば、文化を長年にわたって身に付け、共有するということの難しさがよくわかってくるだろう。

(7) その他の「文化」について

以上のように、言語というのは「文化」の塊であることがわかっただろう。まさに、文化を代表する例である。それ以外にも当然、たとえばスポーツもそれに該当するだろう。今日の一般の日本人がイギリスのポピュラーなスポーツである「クリケット」の試合中継を予備知識なしでいきなり観戦したとしても、果たしてそれを楽しむことができるだろうか。つまり、ルールもわからないスポーツをみたところで、そこで一体なにが起こっているのかをまったく把握できないわけだから、楽しめるはずもないのである。そのためにはまず、クリケットという「文化」を身に付けて、共有しなければならないのだ。また、あるいはヨーロッパ人、たとえばフランス人やドイツ人たちが野球を観戦してもあまり楽しめないだろう。彼らは普段から野球に馴染みのない人々なので、もちろん野球という「文化」を共有できていないからこそ、スポーツは楽しいのである。

一方でまた格闘技というのは、これら野球などの文化よりもさまざまな人々が楽しめるものである。人間の本能的な部分を刺激する意味で、格闘技というのは比較的共有しやすいといえるだろう。国や地域によって個性のあるさまざまな種類の格闘技は、たとえそれらを詳しく知らない人々が見ても、なにが行われているかをかなり把握しやすいに違いない。そもそも、多くの格闘技は、それはど複雑なルールをもっていないことが多い。

さらに例を挙げるならば、音楽も文化として非常に興味深いものである。「音楽とは一体何なのか」と考えてみると、まるで底なし沼に足を踏み入れてしまったかのように深遠な世界へと入りこんでしまう。わたしは、しばしばこの音楽について考察してみるのだが、そのたびに音楽という文化の存在を不思議に思ってしまう。通常、人々はあたかもそれが人間にとっての自然現象であるかのように音楽を聴いている。「これはいい曲だ」というように感想を浮かべながら聴いていたりするのだ。音楽とは何かと問えば、それはひとまず「空気の振動」と答えるのが妥当であろう。しかし、空気の振動すべてが音楽かといえば、それもまた違う。音楽とは空気の振動だが、そこには音階があるのだと主張してみても、それではその音階とは一体何なのかということになる。それに対しては空気の振動による特定の周波数を定義したものだと答える他ない。まさに定義なのだ。「ド」を定義し、「レ」を定義し、そして「ミ」を定義する…音楽の音階とはそれら定義によって成り立つものなのである。それら定義された音階というものを紙に書くのがいわば作曲なのだ（今の時代は紙の譜面だけではないが）。そうしてやっと、譜面通り演奏することになる。この一連のプロセスをみてみると、音楽とはすべて文化そのものであることがわかる。楽器演奏はそれ自体長年にわたって身に着けなければならない技術である。驚くべきことに、音楽とは、どの要素をとってみてもすべてが高度に文化なのである。「歌」も同様に文化の塊である。われわれがごく当たり前のように接し、そし

て当然のように受け入れているこの音楽というものは、まさしくすべてが文化によって成り立っているものなのである。

また音楽は、それを好きか嫌いかという点で人それぞれに違いが大きく分かれるものである。音楽が好きすぎて、将来はミュージシャンになりたいと願う人がいる一方で、まったく音楽に関心のない人もいる。わたしの友人にも、音楽などなくても困らない、という人がいる。とはいっても何も音がないのは寂しいので、彼は適当にラジオのＦＭをかけて過ごしている。しかし、音楽それ自体には一切興味関心を示さない。たまたまラジオから演歌が流れていたときに、なかなか渋い趣味をしているなと言ったことがあるのだが、そのときその人は演歌が流れていたことにまったく気づいていなかった。そういう人もいるなかで、むしろある特定の曲や演奏しか聴かないようなこだわりを持った人もいる。まさに音楽が人間の文化として興味が尽きないのが、この点である。

以上のことからわかるように、「文化」と「自然」という概念の枠組みを使うことによって、いくつもの発見がある。たとえば勉強やスポーツが出来る・出来ないというのは「環境」が影響しているのかあるいは、「遺伝」なのかという議論がある。そして、その正しい回答というのは決して得られないだろう。人間であるかぎり、実態は複雑で、疑いようもなく真であるような原理はほとんどありえない。しかし一方で、環境か遺伝のどちらかに傾きたがる傾向は少なからずある。そういったなかで社会学は、どちらかといえば環境的な側面に焦点を当てるようにする立場をとる。すべて遺伝で説明できてしまうのだとしたら、社会学は必要とされないだろうし、また同様にして人類学もその意義を失ってしまうことだろう。世の中の出来事に対して環境や社会的要因を強調したがる傾向をもつのが社会学なのである。この点では、社会学もまた、自らのもっている傾向について素直に認めてから議論を始めるべきである。自分の学問が不可避にもっている傾向について正直であることは、学問にかかわるすべての人の義務であるといえる。

第二回　社会学の基礎概念

(1)　文化――自然という概念のおさらい

前回の社会学的な概念についておさらいしておこう。文化――それは、「長年にわたって身につけられ共有されたものの価値の体系」である。逆にいえば、身につけられていなくて、共有されていないものを文化として捉えることが困難である。文化の典型である言語をはじめとして、より深いった考察を向ければ、かなり身近な存在である「音楽」などは、まさに文化そのものといえよう。音楽のどこを切ってみても、その中身は文化である。そう考えてみると、人々が当たり前のように親しんでいる音楽とは非常に不思議なものである。歌詞には言語という文化がある。伴奏――いうなればただの〝音〟――には定義付けられた音階という文化がある。作曲し演奏する技術もまた「長年にわたって身につけられ共有された」文化である。換言すれば音楽とは、その文化の関与という意味でこれほど人工的なものはない。このような話を突き詰めていくとそれ自体が独立した芸術論にもなるだろう。

それに対し「自然」とは、自然科学者が研究対象とするものであ

る。人間の身の回りには実にさまざまな諸現象がある。このときそれらが、どこまでが文化的なものであり、どこからが自然的な、あるいは遺伝的なものなのかという問題が生ずる。文化――自然というふたつの概念によって区別をしてみると、少し深く考察を進めていくことができるようになる。

そして、文化的な性質と自然的な性質のどちらを強調するのかは、学問的な立場によって異なる。遺伝学などを研究している人々たちからすれば、後者を強調し、社会のさまざまな事柄――たとえば勉強ができる、スポーツに秀でている、異性にモテる、などなど――を遺伝的に説明しようと試みるだろう。このような遺伝決定論に対して、社会学の研究者は、前者を強調する。社会学者は「社会的背景」に注目したがるわけである。むろんこの種の立場をとるのは社会学だけではない。教育学もまた同様である。ただ、教育学の主張をみてみると、あらゆる人間性や能力をすべて教育に帰そうとする傾向がある。個人的に思うのは、教育によって個々人の遺伝的な要素といった「自然的背景」を克服したり、変更することができるとすれば、それはそれで大きな問題を生み出すことになりかねない。そもそも、教育する側の人々が共有している文化そのものが時代的な制約の下にあり、また特定の種類の社会層の文化を代弁しているにすぎないからである。その一方で、多かれ少なかれ個人の遺伝的な資質というにはあらゆるところに現れる。

このように、学問のそれぞれの立場や傾向によって強調しようとするものに違いが生まれるのである。よく考えてみると、それは至極当然の帰結である。たとえば人間のすべてが遺伝によって決まるのであれば、教育学はその学問的意味を失うだろうし、社会学だって存立が危うくなるかもしれない。遺伝という要素が社会や人間のすべてを理解するために十分なのであれば、社会学者たちが「社会的背景」というものに関心を向けたり研究したりする必要はないのである。

(2) 社会とは何か――その1

ところで、文化人類学を研究している人にとって答えにくい質問がある。それは「文化とは何か」という問いである。それはなぜかというと、彼ら人類学者は、その答えを見つけ出すために遠方まで足を運んで研究に取り組んでいるからである。その質問は、答え方次第によって文化人類学という学問のあり方すら規定してしまうほど決定的なものになりかねない。彼らからすれば、「文化」とはあまり軽々しく口にしてほしくない言葉なのかもしれない。

それでは、社会学者にとって「社会」とは何なのであろうか。正直に言えば、あまりその問いに対して何か明確に答えることができるという自信はない。ようするに、そのような問いに対する回答は、「社会」をどう定義するのかに大きく影響を受けるのである。これはなかなかに深遠な問題である。さらにいえば、「社会」とはどのようなものなのか、ということを考える時点で、自分の社会学研究およびそれがどのような学問であるべきなのかという立場を形成することと、ほとんど同義に近いのである。

とはいったものの、社会とは何かという大きな問題をここで正面にすえて論じることはやめておこう。そこで今回は、「社会」のごく

単純な定義について紹介しようと思う。

「社会」についてかなり素朴な定義だが、「社会とは人々が相互行為する場である」。それでは相互行為interactionとは一体何なのか。それは、まず行為において相手がいることである。それはどういう意味なのか。人々は、相手によって態度や思考や行動などが変わるということである。これは至極当然のことのだと思われる。授業を聞いている自分、友人とおしゃべりしている自分、自宅で両親と接しているときの自分――みなそれぞれ異なっている。もちろん、偉そうに「定義とは」「社会とは」などと小難しいことを色々言っている、このわたし自身にも当てはまることである。いまこうして学生の前で講義をしているわけだが、しかし、けっして息子に同じような調子で話をするわけではない。息子には社会学の話ではなく「歯をみがいて早く寝なさい」といった会話をしている。これはどういうことかいうと、まさに、わたしは、相手によって態度や会話を変えているからである。学生と接するときの態度を息子にとるわけではないし、また息子へのふるまい方をそのまま学生たちにするわけでもない。このように、人間とは相手と状況によってコロコロと態度や言動を変えるのである。それこそが相互行為interactionなのである。高校の部活の学生たちをみていると、後輩が先輩に向かって元気よく挨拶している。しかし彼らは家に帰ると「オフクロ、うぜーんだよ！」などとイキがっているかもしれない。このことはなにも特殊な話というわけでもない。おそらくほとんどすべての人々がみな経験的に理解できるごく当たり前のことである。

それではなぜ、そんな自明の事柄をわざわざ強調しなければならないのだろうか。それには、ある歴史的な背景がある。ヨーロッパの伝統的な学問や哲学のなかでは、いま論じたような「コロコロと態度を変える人間の側面」についてほとんど重要視してこなかったからである。むろんその学問体系がけっして人間が普段から相手によってふるまいを変えるという事実に見向きもしなかったわけではない。しかし、それらはいつも、たとえそのような表面的で流動的な人間関係や態度があったのだとしても、その奥底にはあるなにか絶対的な精神、人間の本質があるというように考えてきたのである。そうして、その人間の本質を探求しようとするのが、ヨーロッパの伝統的な哲学であり、学問だったのである。

そのような学問の潮流に対し、フランスの社会学者エミール・デュルケームは、人間の本質や「本当の自分」というものを見出そうとする探求を哲学に委ね、「コロコロ態度を変える」というひとつの人間の側面をあえて強調する立場をとることにした。デュルケームは、取引先にへりくだった態度をとり、反対に部下には尊大にふるまう多くのビジネスマンなどのような事例こそ、社会学にとって重要なのであり、またそれはまぎれもなく人間の姿なのだと考えた。デュルケームのこのような主張は、当時までのヨーロッパではほとんど見られなかった。それは画期的な発想だったのである。そして、デュルケームの着眼点が、社会学を発展させる契機になったともいえる。

⑶　社会とは何か――その2

先に、「社会とはなにか」という問いが社会学の方向性を決定するほど重要であると述べた。もちろんそのようなことをいちいち考え

なくとも人間は生きていけるのだが、ここでいまいちど立ち止まって考えてみよう。

新聞やテレビなどでニュースを見たり聞いたりしていると、「社会」があたかも「自分たちの外側に存在する何か」のように語られている。それが上空にあるのか、地下三、〇〇〇メートルに位置するのかは知らないが、とにもかくにもメディアなどではたびたび「ザ・社会」というようなものが、人間のまえに立ちはだかっているようにみなしているように思われる。そのイメージのなかでは、「社会」がつねに、ああしろ、こうしろ、などと人間に対して何かを命令したり、あるいは逆に人間の側から社会に要求したりしているように思えるのだ。みなさんはどう思うだろうか。「社会の要求」と言われると、あたかも「社会」という存在がわれわれに何かを要請しているような印象を受けないだろうか。

これは実は深い話である。たとえば多くの社会科学は「社会」のような見方をしているように思えないだろうか。たとえば経済学は、あたかも人間の外側に「経済」という物体が存在し、それがわれわれにさまざまな要求をしているようにみなしている節があるようにも見える。「経済的要求」だの「経済的事情」だのといった言葉には、そのような傾向が見て取れる気がするのだ。私見では、おそらく多くの社会科学には多かれ少なかれあるのだと思う。それでは、そのような「経済」という人間の外部存在が、たしかに存在するものなのだろうか。それを誰か見たことがあるのだろうか。『あなたは「社会」を見たことがあるか』と問われると、それがおかしな質問かのように思えるのと同じように、やはり「経済」というものもまた、外側にはけっして存在しない。もし、「経済」や「社会」という存在がほんとうにあるのだとしたら、是非とも社会学者として見てみたいものである。

このように、あたかも「社会」や「経済」が物質的な何かのように語ってしまう傾向は、実は社会科学全体にまたがって見出しうる。社会という物質的なものが存在し、われわれ人間がそれに対して訴えかけていく、あるいは社会側からこちら側に訴えかける――この考え方を「社会実在論」という。ちなみに、社会科学者のなかで自身を「社会実在論者」であると自負する者はまずいない。通常この言葉それ自体は、批判的なニュアンスを伴っている。

そして、この考え方に対置するのが、「相互行為論」なのである。「社会」という物質的なものなどどこにも存在しないのであり、むしろわれわれ人間がつねに行っている互いの関係の瞬間にこそ、社会が生じるのである。「社会」とはモノでもヒトでもなく、「関係」なのだと考えるのである。

(4) 社会化

社会化――この言葉を聞いたことのある人もいるかもしれない。社会化という言葉もまた日常用語と専門用語とで意味が異なっている。英語 socialization もまた同様にそれぞれで意味が違ってくる。小さな英和辞典で socialization を調べてみると、「民間企業を国営化する」という意味が出ているだろう。しかし、大きな辞書で調べてみると、より違った意味が載っている。やはり英語でも、学術用語と日常用語とでは、使い分けられているのだ。

それではこの「社会化 socialization」とは、社会学の用語として、どのような意味を持っているのだろうか。それは、「特定の集団、組織のなかで共有されていく文化を身につけていく過程」である。これがどういうことかというと、たとえばよく知られた言葉でいえば、「朱に交われば赤くなる」がある。白い絵の具に赤色を一滴でも垂らせば、その色は赤へと変わってゆく。たとえ善良な人でも、ガラの悪い者たちと付き合っていれば性格が変わる。この諺は、おそらくたいていの場合は非難や戒めの意を込められている。これに対して「社会化」とは、より広い意味で用いる言葉である。こちらは、特定の集団や組織にしばらくの間属していると、そこにいる人々の文化に自分もまた身につけていくことを意味している。

社会学という学問が独得なのは、こうして社会学の講義を学生の前でしていること自体が、ある種の実験になっていることである。なにやら思わせぶりなことを言っているように思えるかもしれないが、難しいことを言っているわけではない。講義はじめの四月頃に壇上から学生のみなさんを見ていると、「実にさまざまな人間がいるな」とわたしは思っている。それは当たり前といえば当たり前で、この講義に出席してくれている学生のみなさんはそれぞれ異なる出身、異なる高校の出身である。いうなればみなさんは、それぞれに異なる文化を背負って来ているわけである。そして目つきなどの表情、おしゃべりの仕方などにも当然違いが見られよう。ファッションなどの身なりに違いがあるのは言わずもがなである。それらのような点から、四月当初のわたしは学生を見渡したときに人間のカラフルさを感じたわけである。

しかし、夏休みが終わってふたたび講義が始まってみると、どうだろうか。不思議なことに、だんだん論壇から見渡す風景に変化が生じていることを感じる。夏休み前までには感じていた「カラフルさ」は褪せ、なんだか学生たちがみな「似通っている」ように思えるのだ。ようするに学生のみなさんは、大学という組織にしばらく属し、そしてそこにいる他の人々と一緒に過ごすことで、互いにだんだん似てくるのである。

この話をわたしのゼミにいる学生たちとしてみると、これまた興味深いことがわかる。ある学部四年生の学生は、いま述べた社会化の話を聞いてこう言うのだ。「たしかにこの大学の人たちは皆似通っているように思えてきますね。だけれどそれだけではないと思うのです。というのは、周囲にいる似たようなファッションの人たちをみて、自分だけはそれに属さないような個性を持とうとする者もまたいるのですが、しかしそんな彼らもまた、けっきょく同じ考えを持っている集団に属しているわけで、するとけっきょく同じようなファッションセンスをもつ他の社会化されてしまった人々が生まれる、ということなのです」。このように、「自分はきみたちとは違うんだ」と考えることで、自分と同じような考えを持っている他の人々と社会化し、そこから抜け出そうとすると、また他の集団に属してしまう……もがけばもがくほどズブズブと沈んでいくようなまさにアリジゴク的な社会化の連鎖である。つまり、ここでいう「社会化」とは、ことわざにあるような人々がすべて同一の方向に向かう、というよりは、それぞれに特定のパターンへと収斂していく、という意味を持っている。ファッションセンスがある人は同じく同様のセ

ンスをもつ集団と社会化していくだろうし、逆にファッションにあまり興味や関心がない人もまた、同様のスタイルをもつ集団にどこか似通っていくことになる。

この「社会化」というのは、考えてみれば当然のことのようにも思える。普段からおしゃべりの相手だったり、共に過ごす友人がいれば、自ずと自分たちがどこか似通った雰囲気になる。たとえば、メガネやカバンも、何だかお互いに不思議と似てくるのだ。もっといえば、学部の四年生くらいにもなると、ほんとに数種類にしか満たないくらいに社会化された学生集団に見えてくるようになる。

といったように、社会学は、講義をしているこの瞬間をもひとつの研究対象にすることができるのである。もちろん学生を対象にした社会化だけでなく、組織についても同様のことがいえる。組織については後に講義のなかでより詳しく説明するが、たとえば会社の雰囲気ないし「社風」、あるいは銀行員や警察などのそれぞれの職種といったものは、それぞれの文化を身につけ社会化されたものである。

(5) 社会性

続いては「社会性」という話に移ろう。この言葉は、わざわざここで定義を説明しなくとも、普段からさまざまな場面で用いられているものである。これは、ほんらい社会学や心理学などで使っていた用語である。とりあえず「社会性」の定義を説明するとこうである。「特定の集団が共有する文化に対して自ら適合する能力」。この言葉の使い方としていえば、たとえば「社会性が高い」である。これがどういうことかといえば、特定の人々の雰囲気に自分から合わせにいく傾向が強いを意味している。しかし逆に「社会性が低い」となれば、なんだかその人が周囲の空気を読めない性格であるかのような印象を受ける。

ただし、けっきょく物は言いようである。社会性が高いだの低いだのということは、表現の仕方次第によって良くも悪くもとれてしまうのだ。「社会性が高い」と言われれば、その人の能力があたかも良いように思えるが、言い方を変えればそれは「付和雷同」となる。つまり「自分がない」とみてとることもできるのだ。他にも「風見鶏」という言い方もできよう。周りの風向きに合わせてあっちを向いたりこっちを向いたりするわけである。

一方で「社会性が低い」というのは、その人を朴念仁のように思わせうるが、しかし言い方を変えてみれば、「自分を持っている」「個性的」とも表現できる。そのようにみてみるとどうだろうか。まさに物は言いよう、である。そもそも社会に関することというのは、いまみたように言葉の表現によって受ける印象や解釈の仕方も違ってくるのである。その際にどちらが良くてどちらが悪いのか、という問題は実際のところ判断に難しいところではある。

ここで「社会性」についてたとえば例を挙げてみると、たとえば次のようなものである。大学を卒業後に控える就職において、そこで有利なのはどちらかといえば体育会系としばしば言われている。それがなぜかといえば、社会人スポーツチームの人材を求めている場合をのぞけば、会社側は野球選手やサッカー選手の人材を欲しがっているわけではない。スポーツ、とりわけチームプレーを重要

とするような類の競技に携わっていた人たちというのは、当然社会性が高い。このため「組織」である会社もまた、そのような社会性の高い人材を欲するのである。面接の際に、「私はずっと野球をやってきました」という者と「私はずっと一人で小説を書いていました」という者がいたとき、会社側はどちらをとるだろうか。後者は社会性が高いどころか、むしろしばしば厭世家である可能性が高い。するとどうだろか。もちろん例外はあるにせよ、多くの場合には、採用側は、やはり前者のような社会および組織に順応する能力の高そうな人材を選ぼうとするだろう。

⑹　アイデンティティ

アイデンティティという言葉は何か。これは外来語としてよく見聞きするので、おそらくこの言葉をまったく知らない、という人はいないだろう。アイデンティティはどちらかといえば良い意味を含んだニュアンスで用いられている印象がある。「わが社のアイデンティティはお客様にご奉仕することです」といったように会社のホームページに書かれていたりもする。ようするにその文脈からいえば、自分たちの誇りに思っている事柄を示す場合にこの言葉を用いているわけである。しばしば外来語のカタカナ語は、あまり厳密にその意味を突き詰めることなくフィーリングで使われることがある。「おまえのアイデンティティは何だ！」などと言うように、それは自分たちのポリシーや人生観という意味をも含んでいる。

とにもかくにも、この「アイデンティティ」という言葉は、何か良い意味を込められているように思える。もちろん実際としてそのような側面もこの言葉にはある。しかしここではもう少し広義の意味で定義される。それは何かというと、「〈自分は何者なのか〉という問いに対する種々の答え」である。この講義の定期試験の際に、よく学生が自分でおそらく調べてきたのであろうアメリカの心理学者エリクソンによるアイデンティティの定義を書くことがある。彼らはみな「少年期や青年期において確立されるうんぬん…」という回答をしてくるのだ。むろんこの言葉を初めてもち出したのはこの心理学者エリクソンなのだが、しかし、ここではあくまでも社会学の議論としてアイデンティティという言葉を再定義して扱うのであって――たしかに社会学や心理学は前回も説明したように互いに似通った学問上の性格はあるのだが――、やはりそれぞれの用語は社会学のものとしなければならない。

「〈自分は何者なのか〉」に対する答え――よく聞かれるものかどうかはわからないが、たとえば「汝、自らを知れ」という古代ギリシャのデルポイの神殿に刻まれている言葉がある。それは哲学の根本問題〈自分自身を知る〉である。そう言われると、人によっては〈それは哲学の問題であり、自分には関係のないことだ〉、〈それが何か社会と関係あることなのか〉と思うかもしれない。〈自分とは何者なのか〉などと深く考え込んだ人はたしかにあまりいないのかもしれない。とはいっても、実際のところ、学生のみなさんのような年齢にもなると、しばしばそのようなことを考えているのではないか。

それでも多くの場合、〈自分自身とは何者なのか〉という問いを知る必要はないというように思っているだろう。しかし、それはけっして自分たちとは関係のない事柄ではないのだ。居酒屋でアルバイ

トをしている人たちがしばしば体験していることかもしれないが、たとえば会社員が集まってお酒を飲んでいるとき、彼らはどのような話題で盛り上がっているだろうか。ふだんの仕事に関係することだけでなく――むしろそういう話題だけでお酒が飲みたいかと言われれば、かなり微妙なところだ――、たいていアルコールが回ってくると、おそらくほとんど例外なく他の会社（職業）の悪口を言い始めてはいないだろか。たとえば民間の中小企業の社員たちは、「公務員に俺たちの大変さがわかるか！」などと叫んだり愚痴を垂れているかもしれない。逆に公務員たちは、「民間のやつらに俺たちの大変さがわかるか！」とジョッキ片手に言っているかもしれない。あるいは違う役所や部署に対する愚痴かもしれないが。もちろん居酒屋だけでなく、その他の様々なところでも、そのような場面がみられる。たとえば中学生や高校生のとき、「○○中学の奴らは○○だ」とか「○○高校の連中は俺たちに比べて○○だ」などと話したことはないだろうか。おそらくみなさんもこの手の話を好んでしていたのではないだろうか。ちなみに私は好きだった。そして、それは大学生になっても依然としてみられる光景である。他大学の人たちと自分たちを比べて色々言うわけである。ほんとうに人間はこの手の話が好きである。「○○中学の奴らは全員不良だ」だとか「○○高校は進学校だからたしかに頭はいいが、みんな性格悪い」といったように言うわけである。いったい自分たちが彼らのことについてどれだけのことを知っているのだろうか――しかもたいていの場合、せいぜい知ってるとしてもたかだが数人程度なのである――という具合だが、それでもこのような話を好んでするのである。

その手の話の内容が正しいのかそうでないのかということは別の問題として、ここで重要なのは、なぜ人々は組織や集団について噂話や悪口を好んで言いたがるのか、ということである。これは、少し考えてみれば自ずとわかることかもしれないが、他人や組織、あるいは集団を経由して何らかの事柄について述べるとき、それはけっきょくのところ、自分たち自身のことについて語っているのである。「○○会社の連中はロクなもんじゃない！」と言うことで、自分たちがそうではないことを示しているのである。「○○高校の生徒はみんな性格悪い！」とみなすことで、その高校に属していない他校の生徒である自分たちを性格が悪くないということを示すわけである。どうだろうか。この手の話をするとき私たちは、他人（あるいは組織や集団）を経由することで自分たちのことについて語ってはいないだろうか。

たとえば逆に考えてみよう。人々がみな集まって、それぞれが自分たちの組織のことを褒めている状況をイメージしてみると、実に奇妙な光景に思える。コンパに集まった大学生たちが、「やはり○○大学は最高だ！」と言い合うことは、たしかにそれがないとも完全には言い切れないのだが、やはりなかなか目にしない光景である。むしろよその大学について論評する話のほうがよくみかけるのではないか。不思議である。

それでは〈アイデンティティとは何なのか〉という問いに対する答えは、「他者と自分（たち）について考える」ことなのだ。他人について何かを言うということは、すなわち自分自身について語ることなのだ。さらにいえば、今回もまた「文化」について概念のおさ

らいをしたが、実はこのアイデンティティがまさしく「文化」なのだ。それは、アイデンティティと呼ばれるものが人間にしかない、という事実に求めることができる。他の動物にアイデンティティはあるだろうか。頭の体操をしてみよう。たしかに、動物学者たちからすれば、動物たちの親子関係といった範囲においては、ある種のアイデンティティを見いだしうる。生まれたばかりの子犬やアヒルの子たち。とくにアヒルの子は、いわゆる刷り込み現象がある。さらにいえば、ボス猿たちの地位的立場もまたアイデンティティである。そういったそれらの意味でのアイデンティティはたしかに存在するかもしれない。しかしながら、人間にはそれ以外のアイデンティティが表出する場面が実に多くみられる。たとえば、先ほども論じたような〈組織〉に関わるそれである。みなさんが自宅で飼っているかもしれない犬や猫たちには、「俺は札幌の犬だ」「田舎に住んでいるような犬どもと一緒にしないでくれ」「おれは北海道の猫だ。九州の連中とは違うぜ」などと考えているようには思えない。ハムスターもまた、とうていそのようなアイデンティティを持っているなどとは考えられない。「俺は高級住宅地に住むインコだ」とのたまうインコがいるわけもない。ふつう人間以外の動物はそのようなことは考えないだろう。

しかし不思議なことに、人間はむしろそのようなアイデンティティのことばかり考えている。〈自分が何者なのか〉ということに、かなり熱心に執着をみせる。自分がどのような会社に勤め、そしてそれがどのような職業で、どのような地位なのか。自分がどのような家に住み、年収がどれくらいのもので、趣味が何なのか、いま年齢がいくつなのか。このように、われわれ人間というのは、自分たちのアイデンティティにかなりこだわっている。それは一体なぜなのだろうか。〈そういうものだから、そうなのだ〉と言われればたしかにその通りなのだが、しかし、それについて考えることは、アイデンティティの問題と深く関わりをもっているのである。

逆に考えてみると、たとえばいわゆる〈受験競争〉は、アイデンティティがなければ成り立たないものである。就職活動もまた、アイデンティティによって行われている。どの企業に入るかどうかの選択や、それによって様々に悩んだり葛藤したりすることは、まさにアイデンティティに関する問題である。それにしても、なぜわれわれ人間はこのようにアイデンティティにこだわるのだろうか。他の動物たちと比べれば比べるほど、実に奇妙に思えてくる。もっといえば、人によっては〈特定の〉アイデンティティに対して熱烈に執着する者もいれば、むしろほとんど関心を寄せない者もいる。ある住民は、ある他の特定の地域のことを悪く言ったりする。しかしまったく関係のないところに住む人々にとっては、どちらの地域に住んでいようがほとんど同じなのである。ハタから見ればたしかにそうなのだが、当事者たちにとってはかなり重要な問題なのである。みなさんも思い当たる節はないだろうか。私自身、田舎の生まれなのでこのような地域間の言い合いというのは身に覚えがある。都会の人からみれば、どんぐりの背比べのようなレベルに思えるが、しかしやはり彼らにとっては切実な事柄なのだ。このように、われわれ人間は、他の動物にくらべ、実に多様な側面で様々なアイデンティティを持ちながら暮らしているのである。

(7) ナショナリズム

いまみてきたようなアイデンティティをめぐるこのような抽象的な議論はここでいったん終わらせて、このアイデンティティにまつわる実際的で具体的な例を挙げてみよう。

まずは先ほど話題に挙げていたように、「集団と組織」、「地域」がアイデンティティの具体例として考えられる。この地域は、たとえば札幌かそれ以外か、中央区か白石区か、というような点で持たれるアイデンティティである。他には「年齢」のアイデンティティがある。自分が〈若い〉、〈年をとっている〉などといったところから生じるそれである。これは「若い者といっしょにせんでくれ！」あるいは「年寄と一緒にしないでくれ！」といったような文脈からアイデンティティが生じてくる。

そして次に、男と女という「性別」からもたらされるアイデンティティがある。これに関連していえば、みなさんは「性同一性障害」という言葉を聞いたことがあるだろうか。この言葉はもともと、「セクシュアル・アイデンティティ」という用語で示されるものなのだが、これは生まれつきの自分の性――外見上の性――と、自分自身が感じている〈内面的な性〉――つまり〈自分が何者なのか〉ということを示す際に求められる足がかり――との乖離を意味するものである。生物学的には男なのだが、自分のなかでは自身を女であると思っている。あるいはその逆。それらはまさに、性別における人間的なアイデンティティである。

家柄や血統もまた、アイデンティティのひとつである。今日においてこれらがわれわれのアイデンティティにどれほど影響を与えているのかという問題もあるだろうが、やはり場合によっては依然として影響を持っているようにも思える。地域によっては、まさにこの家柄や血統にかなり固執するところもある。古い歴史のある地域では、「わたしの家系はかつて公家だった」とか「武家だった」ということに強くこだわる人たちもいる。

経済的なアイデンティティもあるだろう。自分たちが金持ちなのか、中産階級なのか、あるいは貧乏人なのか、という区別にもアイデンティティは生じる。さらにいえば、社会階層――これについてはまた改めて詳しく話すとしよう――によるアイデンティティもある。しかもこの階層は、金銭的な側面だけでは表現しきれないような類のものを含んでいる。社会学では、とりわけ後者のような意味での〈社会階層〉を重要視している。先祖代々金持ちでいまでもなお有力な家柄だったり、父の代や自分の代で成功して裕福な家系になったり、あるいはまた、お金がなくとも社会的地位が高い人たちもいれば、お金があっても社会的地位が高くないような人々もいる。これらの意味で、社会階層もまた、アイデンティティとしての役割を果たしている。

まだまだ他にも、様々な場面のなかにわれわれのアイデンティティがある。ここで重要なのは、人間の持っているアイデンティティがけっしてひとつではない、ということである。どの地域に住み、どれくらいの年齢で、男か女か(あるいはそれ以外の性別で)、どのような家庭に育ち、どのような経済状況で、社会的地位はどれほどのものなのか、ということは人それぞれに思うところがあるはずである。

「職業」というのもまた、アイデンティティを形成するものだ。部分的には先ほどの「組織や集団」に関わっているが、しかし職業によってはそれらに属さないものもある。アーティストやミュージシャン、一人で切り盛りする開業医、弁護士などは組織や集団によってではなくまさにその職業という括りのなかで自身のアイデンティティを見いだしている。

このように多くのアイデンティティをもたらす例を挙げてきたが、ついでにかなり説明しやすい他の概念についてお話をさせていただきたい。それは「ナショナリズム」である。

⑻　ナショナリズム

「ナショナリズム」もまた、みなさんがおそらく聞き覚えのある言葉だと思う。これはよく国家主義・国民主義・民族主義と訳されている。それではこのナショナリズムとは何か。それは、「他のアイデンティティに対して国籍や民族のアイデンティティを優先する考え方」である。この定義のなかではとくに、「国籍」がポイントである。この定義がどのようなものか。たとえば人間には様々なアイデンティティがあるという話は先程もしたが、「自分は○○という組織に属して××という地域に住んでいて年齢は△で性別は男／女で、どのような家庭に育ち、どれくらいの所得層で、社会的地位はどのくらいであると思っている○○という職業の自分」ということよりも、自分が「日本人であること」あるいは「中国人であること」「アメリカ人であること」が優先されるという立場が、ナショナリズムなのである。どんなアイデンティティよりも、国籍や民族のアイデンティティが優先される、という考えである。もちろん誤解しないでほしいのが、わたしはみなさんにナショナリズムを持てと言っているわけではない。このように説明できるのが「ナショナリズム」であるというだけである。しかし、考えてみると不思議なもので、日本の周りを含めて（国同士）いろいろ（事情が）ある。日本の近海に浮かぶ小さな島をどこそこの領土だ、と主張し合ってずいぶんと盛り上がっている。これはナショナリズムの事例である。

これらの主張のぶつかり合いで興味深いのはナショナリズムの主張は、他の領域の問題をしばしば超越してしまうことである。たとえばある島の海底に石油や天然ガスが埋まっているだの、一国の漁業権が犯されてしまうだの言われているが、よく考えてみると、もしもその言い争いが軍事衝突にでもなってしまえば、当然、一隻何千億円もする軍艦が破壊されるかもしれないし、一発数億～数十億するミサイルを無数に使わざるを得なくなるだろう。もしもそうなってしまったならば、もはや天然ガスとか石油とかあるいは漁業で得られる金銭的メリットなど、とうに超えた損失になるだろう。もっといえば、戦争で大勢の若者が亡くなるかもしれない。このように考えるならば、長年にわたって各国の間で起こってきた「経済」をめぐる争いが、実際には経済上の利害というよりもナショナリズムをめぐる争いであることがよく分かってくるだろう。

もちろん、もしもほんとうに経済的な原理だけで解決できるのなら、現実にこのような争いは起こらないはずである。「お金のことなどどうでもよいのだ！自分たちの国家の威信、ひいては民族の誇りのほうが重要なのだ！」という考え方があるからこそ起こってしま

う争いなのである。もっといえば、そもそも地下資源というのは実際に採掘してみないとそれが利用可能なエネルギーなのかも定かではない。そういう意味でも、それでもなおその場所にこだわる情熱は、やはり経済的な観点からでは説明できないのである。古今東西われわれは嫌になるくらいにこのような争いごとを続けている。どちらが悪くてどちらが正しいのかという判断は置いておくことにして、これがナショナリズムなのである。

(9) 近代化と社会変動

最後は「近代化と社会変動」についてお話します。これは用語というよりも基礎理論といったものだ。まず、昔の社会と今の社会について。前者は専門用語でいうところの「伝統的社会」、後者は「近代的社会」と呼んでいる。双方の社会ではどのように異なるのか――これは、歴史にかんする社会学なのだが、歴史に詳しい人もいえばそうでない人もいるかもしれないが、三〇〇年前の日本社会と今の日本社会とで、どのように違うであろうか。たとえばモノの値段という観点からそれを考えてみると、昔の社会では何が貴重だったかというと、食料や衣料だろう。つまり当時は、食糧生産が追いつかなくてたびたび飢饉や餓死が起こった社会だったといえる。さらにいえば、衣料は食糧よりも貴重である。なぜかといえば、食糧は自身の生命の維持にとってあまりに重要であるためこちらが優先的に生産され、したがって衣料品はそれよりも優先されないで生産されるからである。もっといえば、当時の人々が死ぬまでに新しい衣服を着れるのは成人するときのような何か特別な場合くらいしかなかった(成人式の晴れ着といった形で、そのような時代の余韻は今日にもなお残存している)。

しかし一方で、そんな暮らしをしていた人々にとってあらゆるものが貴重だったのかといえば、江戸時代の人口がおおよそ三千万人あたりだったとして、住むところはかなりあったと思われる。そしてあまり日の当たらないような農作効率の悪い土地などに自分たちで(近所の人たちにも手伝ってもらって)家をこしらえるわけだ。このように考えると、当時の彼らにとって土地や家というのはそこまで貴重なものではなかった。

それに対して、いまのわれわれからすればどうだろうか。われわれにとって食糧や衣料は貴重だろうか。ただし高級レストランやブランド品などは除いて考えてほしい。あくまでも生物学的な生存の維持のために最低限必要とされるという意味での食糧、つまり栄養学的なそれについてである。今日の人々にとっては、むしろその食糧を摂取しないほうが難しい。わたしもまたその一人である。わたしはお腹に「不良債権」をたくさん抱えているのだ。このように今日の人々は、放っておくと肥ってしまうほどの高カロリーを摂取している。ファーストフードや、おそらくみなさんが好きなポテトチップスなどの袋菓子だって食べ過ぎはよくない。ひと袋で五〇〇キロ・カロリーほどもあるのだから。衣料品もまた然りである。高級仕立てのスーツなどはたしかにべらぼうに高い値段だが、そういったブランドにこだわりさえなければ、いくらでも安い値段で衣服を手に入れることができる。このように、衣服を手に入れるのは実に簡単だし、食べることよりも食べないことのほうがよっぽど大変

だったりする。

今日のわれわれは衣食の点でたしかに恵まれているが、それではほんとうに昔の人たちよりもすべての点において豊かかといわれれば、ほんとうにそうだろうか。たとえば昔の人々にくらべ現代は、土地や住むところが貴重になっている。むろん、過疎地域に行けばほとんどタダ同然で土地が手に入ることもあるだろうが、都市部ともなれば貴重である。そこでは家のローンというものを三〇年もかかって返済しているわけである。三〇〇年前の人々がそんなことをしていたかといえば、間違いなくしていない。まさに当時と今とでは「あべこべ」になってしまっている。いうならば、「あべこべの社会」である。ちなみにこの言葉は正式な用語ではなく、わたしが説明のためにそう呼んでいるだけである。

それではなぜ、このような「あべこべの社会」になってしまったのだろうか。これはかなり深遠な問題であり、しかもこれは社会学だけでなく経済学、法政史、政治学や人類学をも含めた社会科学全般にまたがっている問題でもある。近代化に伴う社会変動がなぜ起こったのか。いわゆる「近代化問題」である。もっといえば、問題そのものが巨大でありすぎて、簡単な答えなどあるわけがないのである。様々な意見や主張を重ねながらこれまで議論されてきたわけだが、ここでわたしがお話したかったのは、今日の多くの人々が抱いている考え方、すなわち「労働観」の変化についてである。

アイデンティティには職業からも形成されるのだと先程説明した。たとえば、「なぜ働くのか」という問題がある。わたし自身、いまもこうしてがんばって働いているわけである。その問いに対してすぐに得られそうな回答は、おそらく「お金のため」であろう。これは考えるまでもなく、多くの人々は、たしかにお金を得て住宅ローンを払ったり家族を養っているわけだから、至極当然のことであるように思われる。しかし、ほんとうに働くとはそれだけなのだろうか。

われわれはほんとうにお金のためだけに働いているのだろうか。逆のことを考えてみよう。ある人物が、使い切れないほどの金銭的余裕のあるお金持ちの人間であるとしよう。そして、年齢的にも人生の半ばをとうに過ぎているとしよう。それでは、もしも、預金を下ろしたら銀行が多大なダメージを受けるくらいのお金持ちの人は、なぜそれでも働くのだろうか。むしろ、それほどのレベルのお金持ちほど、よく働いているようにも思える。大企業の社長は、あるいは各所で名声を得ている有名な経営者は、なぜ働き続けているのだろうか。さっさとビジネスから身を引いてリゾート地に家を建て、しまいには専属の料理人や医師などを囲んで余生を過ごせばいいようにも思われる。しかし、実際に自力で膨大な富を実現した人ほど、熱心に働き続けてはいないだろうか。新聞を読んでいると、とうに七〇歳を超えた人間が「会社がわたしをまだまだ引退させてくれない！」などと嬉しそうに語っているのをみる。これはいったいなぜなのだろうか？これは、けっしてお金で説明できない事柄である。なぜかというと、これはまさにアイデンティティの問題だからである。

むろん、ほんとうにお金を必要としている人にとってはたしかに仕事はお金のためだといえるのだが、ある程度の金銭的レベルにま

で達すると、自分自身や自分の会社の社会的地位や、世間での評判をはるかに重要だと考えるようになる。ビジネスから身を引いて豪華客船で世界の旅でもやってればいいものを、多くの経営者たちは仕事のために世界を駆け回るのだ。そして、いつまでも会社の責任者としての地位に留まりたがったり、経済団体の代表者になったりして忙しく動き回る。こういう人々は、本当に楽しそうである。それはなぜかというと、その仕事が彼らにとっての生きがいだからなのだ。あるいは自分が何者で、世間的にどれほど必要とされているのか、尊敬されているのかということを確認するために日々働いている、といってもよい。つまり、アイデンティティなのだ。

身近な例でいえば、多くの大学の教授がそうだろう。私が知る大学の教授会では、以前あるタブーの案件があった。それは「定年」である。定年退職をするか、あるいはもう一年引き伸ばすか。この話がいったんはじまってしまうと、なかなか教授会が終わらない。この話になると、退職をひかえた年配の教授たちが、みな意見を口々に言い出し始める。なぜ、彼らはなんとか引退を拒もうとするのだろうか。それは、教授職を引退することで自らのアイデンティティを喪失してしまうからである。彼らにとって、これはお金の問題ではないのだ。

さらに、アイデンティティの例でいえば、就職についても同様のことがいえる。わたしは日本がちょうどバブルの時代に大学生だったのだが、学部を卒業し院へ入学した頃にバブルは崩壊した。このとき忘れもしないエピソードがある。バブルがはじけたあおりを受け、女子学生の就職口は激減してしまった。そのせいで、当時はまだ、「OL」という職種が存在していたのだが、それがまさにほとんど消えてしまったのである。わたしの後輩には、父親がバブルの頃に投資で大儲けした女子学生がいた。この人物もやはり、不況の影響で就職活動がうまくいかなかった。精神的にもかなり参っていたようである（そんな彼女をみてわたしは、「金持の親に食わしてもらったどうだ？」という言葉が喉元まで出かかったのだが、さすがにそういうことを言える雰囲気でもなかった）。それではなぜ、こんなにも思いつめていたのだろうか。そう、このケースもまさにお金の問題ではないのだ。「大学を卒業したら就職をする」という、社会のなかにある文化によって形成されたアイデンティティとしての「普通のこと」からの離反にこそ、この人を苦悩にさせた原因があるのだ。その「普通」を何よりも求める当人にとって、就職をせずに親に養ってもらうという現実は、非常に耐え難いものなのだ。とはいったものの、貧乏大学院生のわたしからすれば、そのような生活は羨ましくも思えるのだが。しかし、当の本人にとっては、容認し難い現実なのである。

ようするに、これまでの話で何が言いたかったのかというと、今日の人々にとって「労働」とは、たんに生活だけのためではなく、おそらく大部分の人にとってはまさに「アイデンティティ」のためにあるということなのだ。ここで労働は、「自分とは何者なのか」という問いに対して直接の意味付けをするものなのだ。逆にいえば、たとえば人々が初対面の人と接する際に、その者についてどんなことが知りたいか、という観点からも今日における「職業」というアイデンティティを理解できよう。初対面の人物の何を知りたいか。

家柄か？金持ちの家庭かどうか？出身地か？おそらくわれわれが知りたいと思う情報は、差し出された名刺に書いてあるように、やはり「職業」である。

最後に、身分社会について論じようと思う。「職能社会」――これは専門用語である――という区別について。昔の社会は、「身分制社会」で、自分たちそれぞれがどのような家柄に生まれなのかという事実がアイデンティティなのである。平安時代や鎌倉時代の文学作品（たとえば『平家物語』など）をみればわかるが、そこで登場する様々な人物たちのアイデンティティは「誰の末裔で、先祖代々どこに住んでいるか」ということにある。まさに血統や家柄である。一方で今日の人々からすれば、けっして興味がないとは言えないにせよ、それらの情報はたいして重要でもないだろう。むしろ、是非とも知りたいと思うのは、やはり相手の職業である。

身分制社会は英語でいうとaristocracyである。これを辞書で引くと「貴族」と書かれていると思う。もう少し語彙のある辞書でみれば、「身分制社会」と書かれているだろう。生まれによって社会のランキングが決まってくるような社会のことを、「身分制社会」というのだ。それに対して職能社会はmeritcracyという。meritというのは、個人がほかの人と比べて何ができるかという場合に使われる言葉でもある。その能力(職能)によって社会のランク付けが決まってくるような社会のことを、「職能社会」と呼ぶのである。

（つづく）